1 田浦月見台住宅の活用～民官連携で地域を元気に！～

市長

本日の会見では、谷戸の事業に関して、2件報告いたします。

谷戸は、私自身が生まれ育った環境であり、非常に思い入れのある場所です。

この自分の原点である谷戸で新たなコミュニティを作り、まちづくりに活かしたいと思い、まちづくりのグランドデザインのの一つとして、市長就任当初から、ずっと取り組んでまいりました。

まずは、1件目についてです。

田浦月見台住宅跡地活用事業を、この度、本格的にスタートすることとなりました。

この市営田浦月見台住宅は、令和2年度に入居者が全て退去しており、市営住宅としては廃止し、これまで、入居者は誰もいない状態が続いております。

廃止後の活用や売却について、様々に検討してきましたが、見込みがたたず、通常ならば建物を解体し、土地だけを維持管理するだけになってしまう、言うなれば塩漬け状態に陥ってしまう状況でした。

そこで、建物解体前に、もう一度、ここを活用し、谷戸地域再生、コミュニティ活性化を図れないかと、空き家活用を手掛ける不動産事業者や遊休地の利活用を得意とする事業者の方々に改めてサウンディングを実施し、有効活用できないかと、検討してまいりました。

結果、複数の民間事業者から、既存建物をリノベーションすることにより、活用の可能性があることの報告がありましたので、民官連携事業として、実施していくこととしました。

昨年度、実際に連携を頂ける事業者の公募を行い、本日、ご同席を頂いている株式会社エンジョイワークスさんと協議を開始することとなりました。

本日、ようやく、協議が実り、管理・運営に関する協定を締結し、活用に向けた工事が開始できる「はこび」となりました。

今後、田浦月見台住宅は、専用住宅として使用されてきた既存建物を、そのまま住宅として再生させるのではなく、多様なライフスタイルへの対応ができるよう、需要の高まりを見せている職住一体型の店舗兼住宅へと改修します。

株式会社エンジョイワークスさんと横須賀市が連携し、新しい月見台住宅へ、住む人、来る人の賑わいにより、エリア一帯の活性化につなげたいと考えています。

以上、本日までの経過について、縷々申し上げさせていただきました。

就任以来、やりたかったことが、実現できて、非常に、感慨深く思っています。

株式会社エンジョイワークス 福田代表取締役

皆様、おはようございます。

私の方から計画の概要をお話しさせていただきます。

はい、まず動画をご覧ください。

（PV上映）

ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、このように小高い丘の上に1960年代に建てられた木造とブロック造の2種類の平屋住宅群の全てが、先程市長からもお話がありましたとおり、空き家になっているという状況です。

このような形で入居希望される方に、見学会や皆さんとどのような場所になるといいのかなど、そ

ういったような協議をさせていただいている中でコンセプトをつくり上げて、工事、それから実際の入居を進めていくというような流れになっています。

前提として、こちらは第1種低層住居専用地域と言われるエリアになりますので、本来は住居専用ですが、住居の面積の半分以下、また50平米未満であれば店舗などの用途が許されていますので、その範囲内でいわゆる店舗兼住宅、もしくは人によっては工房兼住宅という形になるかもしれませんが、そういった兼用住宅を目指していこうと、我々はそれを食住一体型の兼用住宅による『なりわい』、ここで何かしらの生業をしていただけるといいのではないかとということで、なりわい住宅なんて呼び方もしています。

このなりわい住宅を目指し4点セットというものを用意しました。

一つは住居の一部を土間打ちにするということと建具です。お店のような店構えになるように、広い開口をつくって建具を設けました。

そして、店舗のサインとお店の前にタープがあると日除けになっていいんじゃないかということで、タープフックを用意して、これら4つの要素をデフォルトで用意するというかたちになっています。次に仕上げについてです。

現状の状態から、内装解体だけを済ませた簡易的な状態をレベル0と呼んでいます。

次にレベル1は、内装の解体のほかに主に水回りなどの設備を新たに入れます。

レベル2は、さらに断熱などを施します。

いわゆる一般的に賃貸住宅としてはこのレベル2の状態です。

なお、レベル0からレベル2においても、基本的には外装である外壁補修は我々が実施します。

あえてこのように段階的に提供する理由は、DIYで内装を仕上げたい方も非常に多いのでレベル0からレベル2の仕上げを選んでいただくような格好にしています。

ここは、ヴィンテージ&クリエイティブというコンセプトを設けていて、このコンセプトと資料の一番表紙に記載してあるような「こんな場所になったら楽しいですね」という、絵を皆さんにご提示し、さらにその中で対話も重ねながらという状態です。

ですので、まだリノベーションは一切施していませんが、仮申し込みは既に47件です。申し込みは1期と2期に分かれていて、1期の募集件数である29戸に対して47戸の仮申し込みをいただいているという状況です。

したがって、入居の倍率は2.6倍を超えているという状況です。

共用部も作ることにしていて、ここの住宅の皆さまに、集会所的にも使っていただけるようなランドリーのスペースやサウナのスペースを設ける予定になっています。

さらには公園のようなスペースも設けますので、地域の周辺住民の皆様にもぜひいらしていただけるといいなというようなことも考えています。

あとは、至る道路の幅が車のすれ違いには少し狭い道になっているので、多くの車がここの地域に増えないように、新たなモビリティを検討しています。

例えば、JR田浦駅と京急田浦駅に電動の小さなモビリティを用意することを考えています。

また、明日(12月14日)にクリスマスマーケットということでマーケットを開催し、入居希望の方と周辺住民の方双方いらしていただいて、29店が出店予定になっています。

実はこのような形でマーケットや見学会にお声がけするなど、何かしら機会を設けてこれまでもいろんな多くの方に足を運んでいただき、ご覧いただく機会を作り、どういう場所になると良いかということ対話しながらこういったコンセプトを設けて、徐々に前に進んでいるという状況です。

あともう一つ、お金の問題です。

やはりこれだけの規模の場所を再生させるということで、かなり資金は必要になるという中で、関わるステークホルダーの皆様にも協力していただいて、みんなで作っていきましょうというコンセプトになっています。

したがって、横須賀市様からも整備費という形で拠出をしていただけるといものもありますし、国交省からも店舗兼住宅を作っていくということでモデル事業に採択をいただき、補助金ができます。

他にも、入居希望の方に、一括の前払い家賃という形でまとまった金額を先に拠出していただくようなことも考えています。

この場合は家賃が割引となりますが、資金をまとめて出していただけるという利点があります。

ほかには、資料に記載してある出資金とは、いわゆるファンドを活用いたします。

地域の住民でこのプロジェクトに興味を持っていただいている方、また地元の企業、時には大手企業にも声をかけていこうかなとは思っていますが、そういった多くの皆さんに金額の多寡に関わらずファンドに出資をしていただいで皆さんと一緒にこの再生を成し遂げていきたいと考えています。

2期も同じ資金がかかりますので、地域の信金さんや更にはいわゆる国のファンド、そういったものもありますので、今そういった所とお話をさせていただいています。

これが、先程申し上げたファンドになりますが、いわゆるクラウドファンディングの形態になっていて、ただし、これは投資型のクラウドファンディングですので出資をしていただいで終わりではなく、皆さんに出資していただいで、一緒に事業を進める中でそこから上がってきた家賃が収益になり、8%のリターンを皆さんに分配させていただく予定です。

5年運用した先で予定どおりに入居が進んでいけば最終的には、出資していただいた元本をお返しするというような種類のクラウドファンディングになっています。

という事で、つい先日の12月の月上旬に募集を開始し、徐々にお金が集まっているという状況です。このような形で、いわゆる地域を活性化していく上で重要なステークホルダーいわゆる地域住民の方や、もちろん地元の自治体や地元の企業、場合によっては大手の企業ですとか、地域の金融機関さん、そういった皆さんと一緒に地域を活性化していく上でどういうことが必要なのかということ常に対話をしながらファンを徐々に、最近関係人口と言われている方々をどんどん膨らませて、またお金もみんなで出し合ってやっていこうというスタイルで進めています。

今回こういった古い平屋の住宅群、空き家になった住宅群をまとめて再生するっていうケースは相当、日本でも稀なのではないかということとそれをまた、今申し上げたステークホルダーの皆さんと一緒に進めていくというスタイルは、まずなかろうと思います。

これを必ず達成して、横須賀モデルとして皆さんにアピールしていければいいなと思っていますので、ぜひ横須賀市にファンと投資をしようということで皆さまにもご支援いただければ幸いです。どうぞよろしくお願いたします。

■質疑応答

記者

古い住宅が並んでいるという外観を生かして統一的な街づくりにするのか入居者が自由に選択してリノベーションできるのでしょうか。また、今日協定を結ばれたというお話でしたが、タイムスケジュールはいつ工事を着工し、入居が始まるのでしょうか。

株式会社エンジョイワークス 福田代表取締役

外観に関しては、今の状態はボロイという表現もできますが、非常に味わい深いものでもありますので、必要な補修はさせていただいて雰囲気を残した形を考えています。

スケジュールに関しては、1期と2期に分かれていて、詳細は松島からさせます。

株式会社エンジョイワークス 松島取締役

1月から1期の工事が始まります。最初は29戸に取りかかり、7月から入居が始まる予定です。また、ほぼラップしながら2期の工事が始まり、9～10月に入居が始まる予定です。

記者

これは公募に何社が応募したのでしょうか。また、資金調達については、それぞれどれくらいの金

額が掛かってくるのかという現時点で分かる金額を教えてください。

まちなみ景観課長

公募は3社から応募があり、審査の結果、エンジョイワークスさんに決まりました。

株式会社エンジョイワークス 福田代表取締役

工事に掛かる費用は、お手元の資料に記載してあるものは1期の費用になります。1期と2期に分かれていて、1期で2.3億円、2期で1.1億円の工事費を予定しています。総事業費は3.4億を想定しています。

記者

国土交通省の助成金や横須賀市からの整備費はどのくらいもらえるのでしょうか。

まちなみ景観課長

市からの負担金は、広場や共用部分の工事費として4千万円を上限に負担金を出す予定です。

株式会社エンジョイワークス 福田代表取締役

国土交通省からは約4千万円の予定です。

記者

谷戸や棚田は景観がよく文化的に残したいと思うところですが、どうしても不便で効率的に悪い場所のため人が離れていってしまっていると思うので、そこに整備に乗り出すという会社としての採算性をどれだけ見込んでいますか。

株式会社エンジョイワークス 福田代表取締役

おっしゃるとおり不便だと考えられる方も非常に多いと思います。一方で、こういう場所だからこそ何か育めるコミュニティがあるのではないかと、新しいことを生み出せるのではないかと考えられる方もいらっしゃるのだらうと思います。そういうことで我々は、そういう方にとっての機会や場になればいいなと賭けています。

記者

1期29戸に対して47件の応募があったということですが、これは1人1戸ではなく複数戸借りたいというケースもあるのでしょうか。

株式会社エンジョイワークス 福田代表取締役

2戸を借りたいと応募してきている方もいます。

記者

横須賀市は人口が減っているということもあり、市としても市外からの転入者を確保するという目的もあるかと思えます。47戸のうち市外から来られる方はどれくらいいらっしゃいますか。

株式会社エンジョイワークス 松島取締役

横須賀市内の方もいらっしゃいますが、割と首都圏から多くの方が入ってくる予定となっています。こういう環境が他の町にはないということと、横須賀の魅力に気付いていただいている方が半移住、最近の言葉で申し上げますと二拠点居住という形で利用いただける外からやってくる方の割合が、かなりいます。

記者

夏に内覧会をやられた時に、取材をした方が市内の方が多かった気もしたのですが、市外の方もいらっしゃるのですね。

株式会社エンジョイワークス 松島取締役

申し込みいただいている方は市外で特に東京の方などがいらっしゃいます。割合としては、市外の方が半分くらいいらっしゃいます。

記者

入居を希望されている方の属性はアーティストや販売店の方などといった方がいらっしゃいますか。

また、入居に関する利用者の家賃はどれくらいですか。

株式会社エンジョイワークス 福田代表取締役

属性は相当幅広く、いわゆるサラリーマンの方が副業や趣味の延長でお店をしたいというケースやプロとしてアーティスト活動やクリエイティブな活動をされている方が入居を希望されているケースもあります。

中身として、お菓子を作って販売される方もいれば、セレクトショップや魚をさばいて定食屋を出そうとしている方、古い自転車のリペアなど飲食からもの作りまで幅広くいらっしゃいます。

また、家賃は6～8万円くらいで、共益費は別途5千円くらいです。

記者

7月から入居予定ということでしたが、そこに足を運んで消費行動をとれるようになるのはいつ頃からでしょうか。

株式会社エンジョイワークス 福田代表取締役

来年からレベル0で入居される方はご自身でリノベーションをしながらそういった活動をして大丈夫ですとしていますので、早い方は早々に始められると思います。

記者

まちびらきという形ではなく順次ということですか。

株式会社エンジョイワークス 福田代表取締役

おっしゃるとおりです。

ただ、レベル2で入居される方が7月頃になる予定ですので、そのタイミングでオープニングイベントができたらいいなと考えています。

記者

1戸あたりの大きさはどれくらいですか。

株式会社エンジョイワークス 松島取締役

概ね40平米です。

記者

入居者に対しての入居の縛りとして、何年は住んでくださいやどれくらいの採算を出してくださいといったものはあるのでしょうか。

株式会社エンジョイワークス 福田代表取締役

縛りは設けていません。

ただし、ヴィンテージ&クリエイティブとしていますので、古いものを大切にさせていただける方新しいものを生み出していただけるというマインドを持った方に入っていただきたいという想いはあります。

また、前払いで家賃を払っていただく方に対しては、払っていただいた期間（例えば5年分）を前提に入居していただくことになると考えています。

記者

基本は5年ということですか。

株式会社エンジョイワークス 福田代表取締役

そうです。

記者

ただ住みたいという方はいらっしゃいますか。

株式会社エンジョイワークス 福田代表取締役

いないです。何かしらの店舗や創作活動を予定されている方です。

記者

土地と建物は旧市営住宅ということで、市のものということでしょうか。それをエンジョイワークスさんに貸し出すというスキームでしょうか。

まちなみ景観課長

今回のスキームは、市で持っている土地と建物を無償でエンジョイワークスさんに協定上は10年間を期間としてお貸しした中で運営していただくということになっています。

記者

住まいと店舗を兼用される方と通いの店舗とされる方がいるということでしょうか。

株式会社エンジョイワークス 福田代表取締役

両方いらっしゃいます。

株式会社エンジョイワークス 松島取締役

調査中ではありますが、住民票を移そうというモチベーションの方は3割くらいだと思います。

記者

1期が29戸、2期が23戸だと資料に記載してある58戸にならないのですが、どういうことでしょうか。

株式会社エンジョイワークス 福田代表取締役

月見台住宅は全部で58戸あります。その中の3棟6戸を共用部として使用します。

ですので、みなさまにご提供させていただくものが52戸ということになります。

その52戸のうち、1期で29戸、2期で23戸募集していくということになります。

記者

車ではあまり来てほしくないという話でしたが、市道などがあり通れるということでしょうか。

株式会社エンジョイワークス 福田代表取締役

通ることはできますが、狭いのですれ違いが難しい場所です。

記者

新しいモビリティを考えているという話でしたが、どういうものですか。

株式会社エンジョイワークス 福田代表取締役

小さい電動のものは色々あると思いますが、キックボードから小ぶりの三輪車のようなものなど、現時点で種類は確定していませんが、既存の住民の邪魔にならないようなサイズの電動のものを検討しています。

記者

ここの市営住宅が廃止となったのはいつですか。

まちなみ景観課長

市営住宅として廃止になったのは、2020年です。

記者

最盛期にはどれくらい入居していましたか。

まちなみ景観課長

最盛期には全て入居していました。

近年は空いているところもあり、廃止に向けて徐々に少なくなり最後に0となりました。

記者

廃止の理由はなんですか。

まちなみ景観課長

老朽化によるものです。

記者

それぞれの建物にお風呂はないということですか。

株式会社エンジョイワークス 福田代表取締役

浴槽はありませんが、シャワーはあります。

記者

サウナはお風呂機能を備えたものということですか。

株式会社エンジョイワークス 福田代表取締役

おっしゃるとおりです。そちらには浴槽があります。

2 HIRAKU(アーティスト村)の新たな入居芸術家を決定

市長

それでは、2件目です。

このたび、アーティスト村 HIRAKU に5人目のアーティストを迎え入れることとなりました。

現在、アーティスト村では、陶芸家の薬王寺太一さん、漫画家であり小説家でもある折原みとさん、そして平面作家の水戸部春菜さんが活動されています。

令和2年からアーティスト村で活動されていた染め物作家の山本愛子さんが、令和6年7月に活動拠点を移すため転居されることに伴い、新たに、谷戸地域の活性化に協力していただける芸術家の方を募集したところです。

今回、アーティスト村を活動拠点にしたいと、8名の方からご応募いただき、審査の結果、今日、ここにいらっしゃる『鈴木晴絵』さんに決定いたしましたので、ご紹介いたします。

美術家の『鈴木晴絵』さんです。

(鈴木さん一言挨拶)

鈴木さんは、美術家として主に版画やドローイング、コラージュなど様々な技法を用いて創作活動をしている方です。これまでも、数多くの美術館やギャラリーにて個展やグループ展を実施しています。

鈴木さんにはアーティスト村に居住していただきながら、創作活動を通して谷戸地域のコミュニティ活性化にお力添えいただきたいと思います。

鈴木さんが加わり、更にパワーアップするアーティスト村の発展に、わたし自身、とても期待しています。

アーティスト村は、今年で7年目を迎えました。

アーティストの皆さまには、どなたでも参加できる地域向けワークショップやイベント、地元小・中学校の総合学習などを通して、地域コミュニティの活性化にご尽力いただいています。

陶芸家の薬王寺さんが行う田浦和泉窯の窯焚きも恒例行事になっており、今年も地域にお住まいの多くの皆さまにもサポートしていただきながら、600点近い作品の制作が終わったところです。

明日(14日)には、この窯で制作された作品を取り出す窯出しにあわせて、ワークショップや地元野菜の販売などを行う地域交流のお祭りを開催します。

鈴木さんにも、早速ワークショップを行っていただくこととなっており、地域活性化のための取り組みにしていきたいと思っています。

今後も田浦地域の皆さまをはじめ、横須賀市民の皆様にも楽しみにしていただけるコミュニティにしていきたいと思っています。

美術家 鈴木 晴絵

みなさん、改めましてこんにちは。

ご紹介いただきました鈴木晴絵です。

私は神奈川県横浜市で生まれ、版画を中心に制作活動をしています。

版画以外にも植物やコットンを素材にし、自分で紙を作る「紙漉き」や、木材を使った立体制作もしています。

近年の主な展示歴は「アートアワード東京丸の内2024」や「CAF賞2024」のアートコンペへの出品や、神奈川県を中心にした会場での個展・グループ展です。

それらと並行して地域プロジェクトへの参加を積極的に行っています。きっかけとなったのは大学生の時に、三重県鳥羽市と自身の母校である女子美術大学が共同で行ったアートプロジェクトです。地域の方々と交流して滞在制作を行い、展示を作っていくプロジェクトでした。新たな場所・人の中で制作した作品は、私1人だけではうまれることのなかった作品となりました。この経験を経て関東中心にいくつかのアートプロジェクトに作家や運営として参加し、現在に至ります。

私が好きな何かを創造するということを通じて、様々な方と直接関わることができ、輪が広がっていくということが、地域プロジェクトの最大最高の魅力だと感じております。

この度この記者会見の場所でも作品を見ていただけるということでしたので、横須賀の豊かな自然に合いそうな作品を持参いたしました。

手前にある作品は「海と少年」というタイトルで、波打ち際に佇む少年を銅版画で描いています。真ん中にある緑色の作品は「山のあなた」というタイトルで、遠くに見える山並みを銅版画と自分で漉いた和紙に版画で刷っています。

奥の作品は「Like a Lake」というタイトルで、魚をモチーフに銅版画と和紙のコラージュで制作しております。

これらの他にも様々なタイプの作品を制作しておりますので、皆さまにご高覧していただける日を心待ちにしております。

そして、この度ヒラクの一員としてお迎えいただいたことを、大変嬉しく思います。

2024年に横須賀市美術館で行われていた「特集：YOKOSUKA ART VALLEY HIRAKU」の展示を拝見しました。

最初に展示が素晴らしかったこと、様々な表現方法を持つ作家さまが同じコミュニティで地域の方と活動をしていることに感銘を受け、私もチャンスがあれば参加したいと強く思いました。

HIRAKUでは、自身が専門としている版画にまつわるワークショップや紙作りを行いたいです。

新たな試みとしては、豊かな谷戸の植生を調べて、HIRAKUならではの紙作り「HIRAKU紙」を作ってみたいと考えております。

実際に生活をし、様々な方と出会うことで現時点では思いもつかなかったようなものがうまれると信じております。

田浦地区のコミュニティ活性化に私なりに貢献できるよう取り組んで行きたいと思っております。

どうぞ宜しくお願いいたします。

■質疑応答

記者

HIRAKUを選んだ理由として、他のアーティストが活動していることが魅力的というお話でした。他分野のアーティストが活動していることの魅力について、もう一言いただけますか。

また、HIRAKU紙はどんな紙になりそうなのかイメージをお聞かせください。

美術家 鈴木 晴絵

私は版画を先行しているので、版画家と一緒に活動していくということもアリだとは思いますが、他分野のアーティストと関わっていくことで、私が知らなかったことや、どのように制作をしているかということを知ることがとても刺激になると思っています。

ですので、こういった取り組みはアーティストとして良い場所だなと感じて、HIRAKUを選びました。HIRAKU紙は、和紙は繊維が長い植物が必要で、HIRAKUの植物から作るとゴツツとした紙になるのではないかと想像しています。

記者

これまでの制作拠点は、ご自宅やどこかのアトリエだったのでしょうか。

美術家 鈴木 晴絵

私は女子美術大学の大学院を2023年に修了しました。その後女子美術大学で現在まで制作をさせていただいています。大学から出たの制作は今回が初めてとなります。

記者

今回は住みながら活動することとなりますが、ワクワク感などあれば教えてください。

美術家 鈴木 晴絵

全てが初めてのことで、どう進めていくかも全て手探りでやっていくことになるので緊張はしますが、新たな自分が見えるのではないかとそして新たな作品が生まれるのではないかと考えています。

記者

これまで横須賀に来たことはありますか。また、横須賀のイメージはどのような場所ですか。

美術家 鈴木 晴絵

生まれも育ちも横浜市だったので、週末に家族で時間ができると車で両親が連れてきてくれたりしていました。横須賀美術館にも何度も行きましたし、三崎の方までドライブをしたこともあったので、横須賀は楽しい週末の思い出がある場所です。

■案件以外の質疑応答

記者

今年一年を振り返って、印象深い出来事や残念だったなという部分があったら教えてください。

市長

今年は能登半島地震から始まったので、防災をどう考えればよいか、どのように地域と連携したらよいか、何をしたらよいかそればかりが頭にありました。

安心安全のために何ができるだろうなど。これは横須賀市だけではなく、能登半島と同じ半島である三浦半島全体で何ができるだろうと考えた一年でした。

走りっぱなしですので、色々なことをやってきても忘れてしまうことも多いのですが、良く覚えていることとしては、今お話しした防災のことが強く頭に残っています。

ブルーカーボンでは、4市1町で取り組みを推進したいということで協議会を設置したことも大きいことでした。4市1町の行政単位を超えて、連携していかなければならなくなったと強く感じています。それが私の今年の中で一番大きなテーマだったと思います。

まちづくりでは、浦賀レンガドッグの周辺の整備です。活性化に向けた協定を住友重工業さんと3月に結び、4～5月でプロポーザルを行いました。浦賀が一步進んだということが大きなことであると感じています。

DXでは、生成AIやチャットGPTをどこよりも早く進めながら、様々なことを広く全国に使い勝手が良いことを知らせながら、全体の底上げをしたいという思いがあったので、とても前に進んだと思っています。

音楽・スポーツ・エンターテイメントでは、私が好きだからと言われていますが、そうではなくこれは街を活性化させるツールであり、様々な仕掛けづくりをしました。これは横須賀のまちづくりの大きなテーマになったことは凄く嬉しいことです。

美術館のジブリ展は大成功しました。また、運慶展をしたことも素晴らしいことだったと思います。ソレイユの丘では年間来園者が100万人を突破しました。これもとても嬉しいことでした。

そのほかにも、中央エリアのまちの再生も進んでいますし、再開発も進んでいます。追浜も再開発が進みつつあるということで、私の公約でもあった北の玄関口をどうするかという意味では、バス構想も進み駅前再開発も軌道に乗りつつあるので、北口の活性化に向けて具体的に進み始めました。南に向けば、久里浜地区に総合医療センターが来年オープンしますし、JERAもでき、マリノスの拠点としても活性化しています。それを通じて駅前の再開発も進みつつあるということで、これも私が公約としてやりたいと思っていたところの拠点を北と南に作るという意味ではかなり前に進めたと思っています。中央の開発もかなり進みつつあり、北・中央・南と三極構造で進んだと思っています。

それから先ほどの谷戸構想で、個性ある地域づくりの中で谷戸は横須賀の歴史であり悲喜こもごもの生活がそこにあり、私も谷戸育ちですから谷戸の中で様々な職種の間、多様化といいますけど、私たち横須賀の間は谷戸の中で色々な考えを持つ人たちが助け合ってきたという歴史があり、完結型の社会でした。さっき申し上げたように不便かもしれませんが、そこで生きていくというテーマは私の公約ですから、谷戸に芸術家が住むことなどが全体として個性のある横須賀のまちづくりだと私は確信していますし、かなり前に進めた1年だったと思います。

そういった総括です。

記者

今のお話の中で、最初の能登半島の防災について、何ができるかということを考えなければならないということでした。

今年度の予算は防災に重点を置いた予算だったと思いますが、その中で市として何ができそうかという答えというか新たなものはありますか。

市長

これから4市1町で連携する協定を結びたいと思っています。これはまだ、もう少し先の話になりますが、連携し備蓄などで助け合うことができるのではないかと。備蓄物資の交換や助け合いに対して、4市1町が何を思っているかと、まずはそこからスタートしなければならないということと、横須賀市は消防団で機動部隊を作りましたし、スペリオルレスキュー部隊も消防局に作りましたので、これはすぐに4市1町に派遣できます。日本全国に派遣したいと思って作っていますので、そういうことを含めて、それぞれの防災計画の中で様々なシミュレーションをし、どういう災害が来た時にそれぞれの都市で今何ができるか、どこが弱いのかと話し合っって弱いところを補い合うという仕組みができないかという連携協定を結びたいと思っています。

近々、それをやりたいと呼びかけをしていて、皆さんが呼応してくれています。カーボンニュートラルについて、三浦半島全体で一緒にやろうという延長として考えてやりましたので、防災だけではなく、例えば、ゴミ処理でも助け合うことができるのではないかと考えています。

能登半島の地震を受けて三浦半島は運命共同体だと思ったので、特に中核である横須賀市が他の3市1町のためにやりたいという思いを強くしました。

記者

4市1町について、夏にインタビューをさせていただいたときに、市長は以前、横須賀ファーストだったという話で、言い方が悪くなってしまうますが横須賀市が良ければよいという印象が強かったです。

今日の会見では、4市1町という括りに対して非常にこだわりがあるという印象を受け、方向が変わってきているのではないかと感じましたがその辺の背景はどのようなものがありますか。

市長

やはり能登半島地震が大きかったですね。これからの時代、どうなっていくかと考えたときに、自然災害や地球規模で何かしなければならぬと感じていたのですが、様々な協議会などでたくさんの都市と付き合いがあり、色々なことを話していますがまずは三浦半島だろうと感じ始め、そういう想いに至りました。確かにかつては横須賀ファースト、横須賀ナショナリストでしたから、横須賀は大変な状況にありましたから、まずは横須賀ナショナリズムを展開しなければならぬなというその思いが強く、ご承知のとおり横須賀のナンバープレートを作ろうと思ったら反対されました。

横須賀ナンバーを作る資格はあったのですが、みんなに反対され非常に残念に思いました。私は横須賀のプライドはあるので、まずは横須賀ナショナリズムを言わなければ、という思いがあるのでまずは横須賀としてのアイデンティティを作り直さなければならないという意味で、あえて横須賀ナショナリズムを唱えていただけであって、今は俯瞰的に物事を見た場合、防災やインフラなど様々なことで同じ半島に生きている人間として助け合う必要があるのではないかとこの思いに至ったということです。

記者

来年の市長選については、4年前と同じように2月の本会議で自民党の議員の質問に答える形で進退を明らかにするというのでしょうか。

市長

そうではないと思います。予定調和はないです。

記者

4市1町にこだわっているということは、もう1期を予定しているということですか。

市長

いいえ。政治を若い時からやっていて、新しい時代に何を残せるかということしか考えていないので、それは首長だけということではなく、自分が社会貢献したいという想いの中で政治を選んでいただけの話で、4市1町のために何かしたいと今はとても思っています。

記者

ジョージワシントンが今年に再配備されましたが、入港した際に基地の司令官も有事や東アジアの周辺状況において警戒感を強めているという話もされていて、自衛隊とも連携を高めていくという話をしていく中で、基地を抱えている町として有事や安全保障について市長のお考えを教えてください。

市長

国政レベルについては、今お伝えはできません。

ただ、厳しく複雑な安全保障関係において、空母の前方展開という日本のみならず地域の平和に大きく寄与していくものであると考えています。そして空母が、横須賀市民の理解を得ながら引き続き安全に安定的に運用されることは極めて重要であると思っています。

記者

最近、亡くなられた方がいたりジョージワシントンに絡んだ事案や飲酒禁止の指令が出たりという状況がありますがそれについてはどう思いますか。

市長

まず、亡くなられた方がいることを報じられていること以上のことは知りません。

飲酒に関しては、自分たちで律してやっていただけるということであるならば、私たちは歓迎をしているところで、その内容についてどういう動機があるかはわかりませんが、おそらく横須賀に迷惑をかけたくないという想いでやられているということだけは評価はしているところです。

記者

湘南国際村に新しい国際カリキュラムをいれたインターナショナルスクールができるということで、英語での授業を幼稚園から中学校まで、将来的には高校までするという念頭に置いているということですが、横須賀市にこういったものができるという市長の感想や期待を教えてください。

市長

ものすごく嬉しい話で、様々な仕掛けをしていてやっとなBC地区に学校が来てもらえるということは大変ありがたく、横須賀にとってはこれだけアメリカが近くにあるにもかかわらず、しっかりとしたインターナショナルスクールがなく、教育環境が揃っていないということが弱点であったと思っています。そこに今回の学校ができるということで、これから様々な方が来ていただいて、横須賀に住む可能性も高くなりますし、街の品格が上がるのではないかと大きく期待しています。

記者

授業料は、正直言ってかなり高額であるということですが、ただ所得に関係なく奨学金を設け、どのような家庭でも学校に入りたい方が入れるようにするというので、学校自体もお金を持っているらっしゃるということですか。

市長

先日、学校の代表者とお会いしまして、素晴らしい方でした。

横須賀のためになりたいとおっしゃってくださっていました。葉山から引っ越して秋谷に住んでいるようで、秋谷を葉山だと思っている人は許せないとおっしゃっていました。

対外的にも横須賀の秋谷ですとお話ししているようで、とてもありがたい話で横須賀大使にしたいと思うくらいで、本当に嬉しい限りです。

秋谷がブランド化していく中で、優秀で様々な経験があつて事業家で、横須賀のために何かしたいということであのようなものを作られるというのは本当に嬉しい限りです。